

J. A. Comenius : Opera Didaction
Omnia (1657) の新版その他について
戸——II

鈴木秀勇

五 (つづき)

絶望の餘り息絶えんばかりに地に倒れ伏した私は、頭上に「歸れ」という・不可思議な聲をきいた。この闇の中から、どこへ、どうして歸るのか。その聲は告げた——なんじの心の家に歸り、なんじの後に扉をとじよ——。私は、あたら限り思念を集中し、目を耳を、口を鼻をとじて、外界との・一切の接觸を斷つた。その時、私はわが心の内奥にはいった。そこは一つの・小さな部屋であった。天井には圓い窓が、周囲の壁には、叙知、柔和、正義、純潔、克己などを描いた繪畫がかかっていた。部屋の中央には、梯子と綱、羽毛に蔽われた翼、圓柱・齒車から成る時計があった。

とみる間に、圓窓がこうこうと輝き、その輝きの中からあるものが現われた。それは、外見は人に似ていたが、壯麗さは、まさに神であった。その顔は、世の常ならぬ輝きをまといっていたが、私は眼でそれを視ることができた。なぜなら、それは恐

怖の念を生ぜしめるものではなく、むしろ地上では見たことのない愛らしさをそなえ、慈悲そのもの、友愛そのものであったから。——よく歸った。わが子、わが兄弟——この言葉と共に、それは私を抱き、やさしく私に口づけした。そのものからは、えもいわれぬ・かぐわしい香氣が漂い、私はいいようもない喜びにつつまれて、眼からは涙がしたり落ちた(第三七、三八章)。

コーメンスキは、このように、「地上の迷宮」から「魂の樂園」への舞臺轉回を、絶望の闇のただ中に訪れる・光と慈悲とに漲る神との出會いを軸として、行うのである。

神は私に語った——なんじが地上に求めてえられなかった喜びは、神の中以外には見いだされぬ。そして神は、神そのものの外には見いだすことはできぬ。しかるに生ける神の寺院とは、神が自ら造りなした・生ける寺院、すなわち、なんじ自身の魂である。なんじがわれと共にここに住むを願うならば、なんじが地上に求めてえられなかったもの、すなわち、平安、悦樂、榮光、および萬物の豊饒は、そこに見いだされるであろう——。けれどもそのことは、私が「すべてを離れ、私自身をも離れ」、目をすて耳をすて、私の所有する・一切を放下するのでなければ、私は神につくことができぬ、私が一切をすてて神のものとなるのでなければ、神は私のものとはならない、ということの意味していた(第三九章)。しかも、その放下は、「自らの友人も、領主も國王も、妻も子も、そしてついに自己自身をも無視する」底の放下でなければならなかった。

けれども、もとよりコーメンスキイは、この放下、無に、極度に積極的な・全く新しい生活原理としての意味を含ましめている。なぜなら、この無が、人が自らを全く神に與えきり、神以外になにもものを自らのものとして必要としない、神以外のなにもものを自らの上に認めないことであるとすれば、第一に、かかる人はもはや「地上の命令に服従せず、その脅迫を嘲笑する」のみか、周囲の世界のいかなるものにも心動かされない、という「キリスト者の自由」を獲得することになるからである(第四三章)。

第二に、人がそれぞれ、自らと自らのものを放下する時、そこには、あたかもひとり人間が他の人間の中にはいりこんだかのように、人々がすべて同じように語り、同じように見、同じように感ずる、という「平等」が立ち現われる。そしてこの平等から、人々の間に、すべての人が、喜ぶ人と共に喜び、苦しむ人と共に苦しむ、という「共感」が生ずる。かつて地上では、ひとりが不幸になれば、他の者は喜んだ。ひとりが過れば、他の者は嘲笑した。ひとりが傷つけば、他の者が利をえた。しかし聖なる人々の間では、すべてがちがう。人は誰しも、あたかも自分の中から追出すように、他人の中から不幸と苦惱とを追出すと努める。追出すことができなければ、不幸がわが身にふりかかったかのように、他人の不幸に心を痛める。「人はすべて、魂がただ一つであるかのように」心を痛める。羅針儀の鐵針が、ひとたび磁石にふれると、世界の・同じ方向を指し示すように、すべての人の魂は、愛の精神にふれて、

幸福の時には喜びに、不幸の時には苦痛にと、同じ方向に動くのである(第四三章、第四一五節)。

第三に、一切の放下は、所有物の「共有」の原理でもある。地上では恥すべくも、ある者は豪華な美衣を着飾っているのに、ある者は裸である。ある者は腹一杯つめこんでおくびをしているのに、他の者は空腹をかかえてあくびをしている。これに反してキリスト者は貧しく、地上でいう財寶をほとんど持たぬけれども、僅かな所有物も共有と考へ、必要とする人には喜んでこれを與え貸す。なぜなら、自らのもの一切をすて去ったキリスト者にあつては、魂が共有であるように、「萬物が萬人に共有である」からである(第四三章、第六節)。

『魂の樂園』の部全二八章の中核をなすと思われる・右のような・コーメンスキイの社會觀が、ターボル派のその系譜にたいし、どのような關係に立つかは、われわれの解明すべき課題であるが、ここで著者が神をして「すべての造られたものからなんじを解き放ち、なんじ自身をも否定し、かつすて去つた時に、なんじはわれを見いだし、われの中に充ち充ちたる平和を見いだすであろう」と語らしめる時、平和は、右に見た・新しい生活原理によって初めて確立される、という意味をこめられていた、といえるであろう。

コーメンスキイの平和主義をうかがう鍵も、(おそらくそれと相連なる)P&E 理念をたずねる機縁も、この付近にひそんでいると考へられるのであるが、本拔萃へのジャン・ピアジェ(Jean Piaget)の序文が、本作品からの拔萃を行った意圖につ

いては全く語っておらず、抜萃もまた前編『迷宮』に限られ、後編『樂園』からは一章も與えていないのは、どのような理由によるのであろうか。

(1) 『地上の迷宮と魂の樂園。別名、現世と世事萬般との中には、混亂と眩暈、無常と苦惱、欺瞞と幻惑、悲慘と憂愁、いには萬事の厭惡と絶望と以外のなにものもなく、自分の魂を住處としゆゑなる主、神に向う者のみが、正しく・充實した思念と平安と悦樂とに達することぞ、示す活圖 (Labyrinth Světa a Lusthauz Srdce: to gest, Světélé Wymalowány / kterak w tom Světe, a wíceech geho wssechněch, nic není než Matení a Motání, Kolotání a Lopotowání, Mámení a Ssalba, Bjda a Tesknost / a naposlady Omrzení wsseho a zauříání: Ale kdož doma w srdcy swém sedé, s gediným Pánem Bohem se wzwájrá / ten sám k pravému a přnému mysli vpokojení a radostí že přichází. MDCCXXXI [Leszno].』の出版は、右のやうに一六三一年であるが、巻頭の・ニコロチン侯 (Karel z Zerotín) の獻呈状の日付は、一六二三年一月二三日となっており、また侯の藏書中から、一六二三年とされるされた。本作品の草稿が発見されている。

一六六三年(阿姆斯特ダム)の第二版から一九五五年までに、三六種の原語版が出版されており、ドイツ語譯四種、ポーランド語譯、英語譯それぞれ二種、その他のうち

に、一九五七年のノールウェー語譯などがある。
なお、タイトル中、「樂園」Lusthauzの語は、第二版から *ráj* すなわち「天」に變えられた。

(2) 當時の亡命ボヘミア兄弟會の人々の唄に「われらに残されしもの一つとしてなし。われらすべてを失えり。われらの手にあるは、クラリーツェの聖書と地上の迷宮のみ」。(Count Lützow: History of Bohemian Literature. Lond. 1907. p. 249.)

(3) Lützow. p. 277.

(4) 前註(1)のやうに版本は多数であるが、研究書は、Pražák, František: *Ráj srdce*. Praha, 1958. のみである。

(5) 本書には、「この都のちまをローメンスキー自ら描いた圖版が付されている。

(6) 一七四九年ケーニヒグラーツで公けにされた禁書目録には『迷宮』が記載されている。

(7) ローメンスキーは「靈(duch)を掌る聖職者(duchovní)を、收入(důchod)を掌る收納係ないし收稅官(důchodní)とかけているのである。

(8) 梯子と綱は、天の光さす窓から外界を見るため、翼は、天なる神の榮光と、地なる・心貧しき者の魂との間を往復するためのものであり、時計は、世界の運行と、神の・不可思議な・導きの手とを象徴する。

六

スィーブルト編集『ボヘミア史文獻』第五卷 (Zibrt, Čech: Bibliografie české historie. [Sv. I—V. Praha, 1910—12.] Sv. V. str. 325—650.)』に於れば、一九一一年までに知られた・コーメンスキの草稿、刊本ならびにそれらの版本、および彼に論及した著述の總数は、一一、三〇〇點をこえるのであるが、とくに草稿類のうちには、著者の生涯の波瀾ゆえに、現存しないものも少くない。

たとえば、彼のODO出版を決意させた・レンシュンにおける草稿焼失(本稿第三節)についても、フィゲルあて書簡(右節、註(一))の中で、彼が罹災した資産、書籍を列挙したあと、「ともあれ、悲しいかな、以下のものが失われました」と嘆きながらしている。八編の草稿——すなわち、1. 『汎知學の森』(『Sylva Pansophica, sive Universitatis rerum et Definitionum Thesaurus.』)の『汎知學の凝結』(『De Pansophia condenda deliberatio.』)3. 『汎知學の全作品』(序説、根元界、理念界、などから成り、印刷準備完了のもの) (Omnia illa Pansophica... ad typum parata. Ex. gr. Introitus, Mundus radicalis, sive Deus in aeternitate sua consideratur, Mundus item Idealis, etc. etc.) 4. 『メタフィジカ關係の全作品』(Metaphysica et omnia, quae eo spectant)の三〇年の勞作『ボヘミア語—ラテン語辭典』(Thesaurus Linguae Bohemicae et Latinae, opus 30 anno-

rum)』6. 『4みがえれるハガイ』その他、神學論文三九編 (Varii Tractatus Theologici, ad 39 numero, Haggaeus redivivus et alii.) 7. 四〇年をこえる間の隨想、演說原稿のほぼ全部 (Meditationes meae et Idea Concionum ultra quatragesima annos, prorsus omnes.) 8. 『福音教徒の協和』(Harmonia Evangelistarum)』——の大部分について、われわれは、その内容を知るすべを永遠に奪われている。上記のボヘミア語—ラテン語辭典や、7の述作が、それぞれ三〇年、四〇年にわたる・貴重な勞作であるばかりでなく、1の『汎知學の森』が「二〇年以上にわたる營々と積み上げられてきた集大成」であったことや、3の作品に暗示されている體系的構成などに照すならば、これらの草稿の焼失をいたむのは、もとより著者のみではない。コーメンスキが、自然への類比の方法に加えられた批判にこたえた『再三實見された……知え』(本論叢三月號『ロメニウスにおける Methodus analytica et Methodus syncretica』第七節)もまた、この時レンシュンで失われたらしい。

この折コーメンスキが、災禍を免れたものとしてあげている、1. 『全事物界の圓形劇場』(Amphitheatrum universitatis rerum)』2. 『反キリストに立ち向う圓楯』(Clypeus contra Antichristum)』3. 『勸告』の作品および若干の汎知學作品 (Opus Consultatorium et Pansophica quaedam)の草稿中、1も兵火の際一時行方不明になり、著者の手もとに戻った時には、全二八編中、自然界にかんする第二編(全一二

五章)が失われていた、と伝えられる。

けれども一方、後年(一六六一年)モンタヌス(Peter Montanus)あて書簡中で「コーメンスキーが自ら『主著(opus principalis)』とよんでいる。右の作品は——彼がブルジェロヴでボヘミア兄弟會聖職者兼學校教師であった二十數歳の頃に着手した『全事物界の劇場』(前記小論第七節、註(6))の繼續であるが——、幸いにも一八九三年にホレシヨウヴ(Holesov)でミクラシユ・ドラゾク(Mikulas Drabik)の遺品中から草稿が発見され、國民博物館の手にはいり、『コーメンスキー總著作集・第一卷』中に印刷されて、世に知られるに至った。また、前記焼失草稿中の『よみがえれるハガイ』は——一六三二年スウェーデンの勝利とザクセン軍のボヘミア進攻とにより一時は祖國解放の希望が實現されるかに見えた折、かつてバビロニア虜囚からかえったイスラエルの人々に向い、神の殿の再建をよびかけた豫言者ハガイに自らを擬したコーメンスキーが、亡命から祖國にかえる人々にたいし、現世の事物と利己とに心奪われて、キリストの福音の精神による・自己と全社會との生活の根底的改革を忘却してはならぬ、といましめた・警告の書といわれるのであるが——、これまた幸運にも、同じ亡命者のシーモン・ドーランスキー(Simon Dolansky、一六七二年歿)が、この草稿を手寫しており、この稿本がツイタウ(Zytau)の公立圖書館に所蔵されているのを発見した・ボヘミア兄弟會史家ミューラー(Josef Müller)の手で、やはり一八九三年に刊行されている。

草稿の探索からその公刊に至る・同ような経緯は、二、三の例をあげるだけでも、ボヘミア語『教授學』(本稿第一節)、『ボヘミア王國における學校改革にかんする・簡短な提案』(同第四節)、『ボヘミア語』(母親の學校の教示) (同節)、『コーメンスキーの・第四の教授學ともいふべき『教授學の落穂拾い』(前記小論、第五節、註(2))、あるいはまた、兵火を免れた草稿中の『勸告』——すなわち、『人事の改善にかんする總勸告』——に、それぞれまつわっている。とくに、七部作の右『總勸告』については、その初二部が一六五六年ないし六二年に出版されたにとどまり、殘餘の草稿がチージェフスキー(Dimitri Czejsky)によりハレ(Halle a. d. Saale)のヴァイゼンハウス(Waisenhaus)文書保管所から発見されたのが、實に一九三五年のことである。爾後(ヘンドリッハ(Josef Hendrich)による・内二部のボヘミア語譯、チージェフスキーその他による・内一部のラテン語テキスト、ドイツ語譯對照版以外には、『總勸告』全體の刊行も、研究も現れていないのが、現状である。右に見たところから知られるように、散逸草稿の探索の手掛りも、コーメンスキーの書簡ないし現存著作に求めるのは、自然であり、そこにターンブル(G. H. Turnbull)のように、廣く同時代人の往復書簡中の記録に基いて、コーメンスキーの著作目録を作成する努力が拂われる理由もある。しかし、この點についての・組織的な探究の試みが、すでに一九一〇年、つまり、レーベル、ノヴァークらによる『總著作集』發刊とはほぼ時を同じくして、クヴァチャラの手で開始され

た。すなわち、彼を編集者とする『J・A・コーメンスキの生涯と著作』にかんする研究のための紀要『Archiv pro bádání o životě a spisecch Jana Amosa Komenského. Sesit I—XV. Brno, 1910—1940.』がこれである。これは、コーメンスキの思考内容の研究よりは、むしろ傳記的・文獻的究明のための史料發掘に力を注ぐものであり、『總勸告』草稿發見をめぐる・チージェフスキの報告「J・A・コーメンスキの著作の草稿 (Hališké rukopisy děl J. A. Komenského. 2) 44, 1) 5『紀要』の休刊前最後の號(一九四〇年、第一五號)に發表された。

これ以後刊行を見なかつた『紀要』が、一九五七年、ODO新版の出版と同時に、第一六號から、體裁をあらため、誌名を一語變更し、科學アカデミエ・コーメンスキ名稱教育學研究所の仕事として、復刊されたのが、『J・A・コーメンスキの生涯と作品』にかんする研究のための紀要。アクタ・コメニアナ (Archiv pro bádání o životě a díle Jana Amosa Komenského. Acta Comeniana. 6) である。編集長はハループ、編集委員會には、バートチュカその他が名をづらね、プラムボラが編集事務局長である。

この『紀要』の昨一九五九年・第一八號をみると、卷頭に故トウルデーの遺稿「コーメンスキとデカルト (Josef Tvrdý: Komenský a Descartes. (1940 ?) str. 1—15)」が掲載されている。トウルデーはここで、コーメンスキの哲學的發展段階が神祕主義に始まり再びそれに終るものと規定し、か

つては傳聞によつて彼に好意を寄せていたデカルトが、汎知學著作の検討に至つて、コーメンスキにおける・超自然的認識と科學的認識との混在を非難した理由も、そこにあるのであり、兩者の邂逅後コーメンスキがデカルトに加えた批判にもかかわらず、自然學にかんしては後者が正しく、前者は科學と神學とを混同していた、とし、コーメンスキを、綜合を追求する・ルネサンス型文化哲學者に、デカルトを、分析的な十七世紀の合理主義者に、それぞれ特徴づけている。續く・バートチュカの論作「Jos・トウルデーの『コーメンスキとデカルト』への・若干の注解」は、——コーメンスキの哲學をルネサンス哲學とする解釋は、バロック主義の影響によるものであり、トウルデーの論文執筆當時すでに現れていた・近代的な理解に逆行するものである、とくに故人は、汎知學の意義を低く評價しており、思考發展の段階規定の點でも、『總勸告』の未刊部分について知るところがないため、汎知學思考の發生と、『總勸告』第六部『汎改革』のプランに至る・その展開との間を、區別していな——と論評している。

しかし、注目すべき論文は、むしろチェルヴェンカの「コーメンスキの『言語の扉』の二つの版とそれらの諸改訂本 (J. Červenka: Dva typy Komenského Dvřetř Jazyku a třnáz jejich zpracování. str. 19—39)」である。『扉』は、ボヘミア語『教授學』中にもその書名が現われているほどの初期作品であり、まさに世界的な注目を浴びた著作であるが、これを専ら言語教育のための著述と見なすのは、同時代人

のみならずその後の教育學史の通例であつた。(2) これにたいし、
 チェルヴェンカは、コーメンスキーにおける・言語教育の意味
 を再吟味し、『扉』は、むしろ事物教育のための・つまり著者の
 教授學的レアリスマスが語り出されている作品であること、い
 な、レアリスマスにとどまらず、事物界の全體知の教授を旨指
 すエンツィクロペディスマスがそこを貫ぬいてゐること、さら
 に、『扉』が、同時代の百科全書家の影響下に生れたとは見え
 なおそれを超える點は、生命ある連關に充ちた總體知の教授を
 志したところにあること、を立證しようと努めてゐる。チェル
 ヴェンカの論文の・第二の意義は、『扉』の一六三一年のラテン
 語レシユノ初刊本、同三三年のグダンスク刊本、同年のボヘミ
 ア語レシユノ刊本を、第一の版に、同四九年のレシユノ刊本、
 同五二年のシャロンヌIIバタク刊本、同六六年のアムステルダ
 ム刊本を、第二の版とおさえ、この間に見られる構想發展を圖
 式によつて示すと共に、各版内の三刊本の異同をしるし、更に、
 著者の認證をえずに西ヨーロッパ諸國で刊行された諸刊本につ
 いて、右二版に基く分類を施したところにある、と見えよう。
 興味深いのは、サヴェートの研究者チューマの「一八世紀前
 半のベチェルブルク・ロシア語II日本語學校における・コーメ
 ンスキーの教科書 (Андрей Цума: Ученые книги Комен-
 кого в Петербургской русско-японской школе в первой
 половине XVIII века. стр. 70-73+4)」である。これは、
 コーメンスキーの・有名な『可感界圖示 (Orbis sensualium
 Pictus. Hoc est, Omnium fundamentalium in Mundo Re-

rum, et in Vita Actionum, Pictura et Nomenclatura
 etc. Nürnberg, 1658.』が、ロシア語II日本語教授用に改作
 された圖書についての・四葉寫眞圖版いり報告である。これ
 は、一八世紀初めピョートル大帝によつて設立された右學校の
 藏書中から發見されたものであるが、この教科書は、各ページ
 左右二欄に分たれ、左欄にロシア語が、右欄に同義の日本語が
 ロシア字で手書されてゐる(たとえば、第九三章中の「Тигор-
 пафия - шовоура」[書物屋]、第九七章中の「школа - школа
 пафия (школа Isia?)」など)。この報告は、かつて『紀要・
 第二號』(一九一二年)掲載の論文「ピョートル大帝下のロシア
 への・コーメンスキーの教科書の滲透」を、サヴェート側の資
 料で裏づける結果になつてゐる。
 前記『地上の迷宮と魂の樂園』と成立期を同じくし、若きコ
 ーメンスキーの・政治的・社會的見解をうかがう上に共に重要
 な『憂愁の人 (Truchlivý: (Praha, 1624)』(第一、第二
 部)の草稿につづての報告が、ノヴァークの「憂愁の人の古新
 草稿 (Bohumil Novák: Staronový rukopis Truchlivého.
 str. 56-62)」である。右の作品によつては、二種の後年手寫
 稿本が知られてゐるのみであつたが、一九五七年六月から翌五
 年八月までプラハのヴァルドシュテイン宮で開かれたコーメ
 ンスキー展示會に、一六二四年とされるされた・第一、第二部の
 原草稿と思われるものが、フリント教授(Anton Frinta)から
 出品されたのを機に、ノヴァークはその由來をたずねようと
 するのである。

この草稿は、フリント教授が一九二二年、シュレジアのベドルジホーヴ・ターボル (Brztichov Tabor) を訪れた際、ナタナエル・カーチェル (Nathanael Kaser) から贈られたものである。ここは、ナタナエルの曾祖父で、ボヘミア語『教授學』草稿発見者ヨーセフ・カーチェルが四〇年にわたり聖職に携っていた地であるが、一八四〇年頃ヨーセフは、友誼を結んだブールキン (當時ブレースラウ (Wrocław) 大學の醫學教授) に、レシュノにあるボヘミア兄弟會文書保管所のコーメンスキ草稿類のことを伝え、ブールキンの盡力でこれらは一括してプラハの國民博物館に收められた (ボヘミア語『教授學』草稿も、この中に含まれていたもの、と思われる) (本稿第一節)。

ヨーセフは、これとは別に、『憂愁の人』と書かれた草稿を所持しており、これをブールキンにも見せ、「この名作の筆者が誰であるかは、もはや疑う餘地はない」旨しるしている (一八四一年五月二一日付、ブールキンあて書簡)。ところが、この書簡でカーチェルが、レシュノ草稿類の中に、期待していたボヘミア兄弟會史料が発見されず、これはヘルンフート (Herrnhut) へ賣却された、と傳えた文面が誤解されて、ヘルンフートに散逸したのは『憂愁の人』の草稿である、と信じられる結果になった。『總著作集・第五卷』(一九一〇年)中にこの作品(第一、第二部)を収録したノヴァーク (Jan Vaclav Novák) や、全部を刊行したソウチェク (B. Souček) が、あらためてカーチェル家所蔵の草稿についてたずねようとしなかったのは、この事情による。

ところで、一六五四年コーメンスキが、ハンガリアのシャロシュェイバタクからレシュノへの歸途、スロヴァキア (東部チエコスロヴァキア) のプーホフ (Puchov) にいる義兄、福音派聖職者ヤン・エフロン (Jan Efron) を訪れたことは、同年六月二日の・兩人の署名から明らかである。コーメンスキは、この時、おそらくあの草稿を義兄のもとに残して去ったのであろう。

はたしてこれを手にいれたのは、同じスロヴァキア出身の一聖職者であり、彼はこの草稿に「ペートル・シコラ (Petr Siskora) の座右鑑。一七八五年」と書き込んでいる。彼は一八一年からシュレジアに移ったのであるが、同三〇年にこの地にきたヨーセフ・カーチェルがえた妻ゾフィーエ (Zofie) は、外ならぬこのペートル・シコラの息女であった。

このようにしてノヴァークは、ヨーセフを経てナタナエルに傳えられていたにも拘らず、執筆以來三三三年も公けにされる機をえなかった『憂愁の人』の原草稿の由来を紹介しているのであるが、この・ノヴァークの論文といい、上述の・チェルヴェンカ、あるいはチューマの報告といい、文字通りアクタ・コメニアーナとしての『紀要』は、コメニウス學 (Comeniológia) の進展の上に、一層の重みを加えるものであろう。

- (1) ODN-IV, 6.
- (2) Paterna: Korres. 234.
- (3) コーメンスキは、三人の同時代人——シュレジアの「キリヤン (Christopher Kotler)」在「リシト」のボヘミア

兄弟會聖職者の娘ホニャターノフスカ (Kristina Pontatovská) 同く兄弟會聖職者でローメンスキーの同郷人でありまた幼な友達のドラビーク——の豫言に深く心ひかれたらしい。一六一六年から同二四年にかけ、福音教徒の被迫害と苦難とは程なく終りを告げ、彼らの勝利が齎されるであろう、と説いたロッターの言を、早くも一六二五年に自らホニャ語に譯した草稿『クリスタノフ・ロッターの夢幻と啓示 (ローメンスキーによる)』ホニャ語譯 ('Widění a zgewenij Kristofa Kottera Sprottawého, kteriz měl od letta 1616 až do 1624, do Česstiny přeložena letta 1625 (od. J. A. K.))』(一八世紀手寫稿本が現存している (右の出版は『リマニク』一六二八年))。

ローメンスキーの『闇の中の光』('Lux in tenebris... 1657') は、ロッター、ホニャターノフスカ、ドラビーク三人の、それぞれの時期における豫言を集録した作品である (一六五九年、同六四年、六五年に再版)。ドラビークは、ソブスブルク家とロマ教會とに呪咀の言葉を浴せ続け、一七二一、一七二七年に絞首された。

(4) 'Vševýchova', Praha, 1948. — 第四部『汎教育 ('Pampaedia')』(註)。

'Všenáprava', Praha, 1950. — 第六部『汎改革 ('Pamorthosia')』(註)。

(5) 'Pampaedia', Lat. Text-Deutsch. Übers. Hergs.

von D. Tschizewskij, Heinrich Geissler, Klaus Schaller, Heidelberg, Quelle & Meyer. — 一兩年前から出版豫告されながら未刊のようである。

(6) 昨一九五九年に、マカザニエ出版所から出版される豫定であった。

(7) 'Hartlib, Dury and Comenius', Lond. (U. P. of Liverpool.) 1947, pp. 440—449.

(8) 本の發表の續きは『Zeitschrift für slavische Philologie』(Bd. 19, 20 (1947)).

(9) 本稿第一節のよきな諸國語版のほかに、一六六六年のオランダ版と改訂版によるオランダ語版、フランス語版までが作成されたようである。

(10) J. V. Novák, Hendrich, J.: J. A. K. Jeho život a spisy. Praha, 1932, str. 163~, 261~, 267~.

(11) 第一部のタイトルは『憂愁の人。別名、祖國と教會との・痛ましき破滅に注ぐ・キリスト者の・悲しみと憂ふことに沈む嘆き…… ('Truchlivý, to gest Smutné a tesklivé, Xlověka křesťanského, nad žalostnými, Wlasti a Cyrkwe Bídami, narikání...')』。第二部のそれは、『憂愁の人第二部、別名長きにわたる・神の答と苦難との間に新たに吹きつゝる嵐と人間の中につまざる悲痛…… ('Truchlivého druhý díl, to gest, Rány obnovující se w člověku tesknosti w case dlanho trwagjých Božích metel a t'zkosti...')』。

(12) 一つは、リプトフスキー聖ニコラス (Liptovský Svätý Mikuláš) にある「トラノスキュウス圖書館 (Knihnica Tranoscius)」所藏の・一七世紀後半手寫稿本、他の一つは、ストラホフ (Strahov) 修道院の所藏の・やはり後年手寫稿本である。これらは・福音派ないしボヘミア兄弟會の人々が・コーメンスキの著述の手寫に、苦難の時代の慰めを求めた證據である、とされている。

(13) カーチェルの・プールキンあて書簡 (一八四一年六月二一日) 中の當該箇所は、つぎのとおりである。

「とかくする間にレシュノに到着しました。……しかしこの旅の收穫はほとんどありませんでした。求めていたものは、残念ながら、そこには發見できなかったのです。祖國退去以來の・兄弟たちの記録が含まれている旨、度々申し上げておりました・例の草稿は、もう當地にはありません。ヘルンフートの兄弟會の人々が、ボヘミア兄弟會史執筆のため、五〇〇ターレルの高値で、一年ほど前に草稿を買い取って參った由です。……私が持ち歸りましたのは『兄弟會宗教會議決議録 (Decreta sinodni Jednoty)』二卷です。それには若干の加筆修正が見られますが、美しい筆跡でしたためられ、たしかにコーメンスキの自筆と信じられます。いや、間違いはありません。いつぞや、お

目にかけてました・私の手もとの草稿、憂愁の人の表題で、その名作の筆者が誰であるかは、もはや疑う餘地はありませんが、あの草稿と同じ筆跡です。——いづれにしましても、賣られた草稿は、ヘルンフートに行かねば見られないわけで、私にとっては喪失したも同然です」。

ヘルンフート (主の護り、の意) は、ドイツ敬虔主義の父ツィンツェンドルフ (Graf v. Zinzendorf) により、一七二二年、亡命ボヘミア兄弟會の人々のために設立された町であり、ここから「ヘルンフート派」が生れた。

(14) コーメンスキは、モンタヌスあて書簡 (一六六一年一月一〇日) の中で、『憂愁の人』にふれ、その第三部は一六五一年に、第四・最終部は一六六〇年に付加された、と語っている (Patera: Korres. 235)。第三部は『岩の裂目なる雉鳩の呻き (Kvání hrdičky v rozsedinách skalních…)』、第四部は『神の怒りにおびえる牧師の悲語 (Smutný hlas zaplášeného hněvem Božím pastýře…)』である。

紙幅が盡きたため、『人事の改善にかんする總勸告』の紹介は、次ぎの機会にゆずる。 (一橋大學助教授)